

【ロードマップ骨子（案）に対する評価】

- 取組を短期的・中期的・継続的に分けることに賛同。5つの能力をどこまで身に付けるのか、コンセンサスを得ることが、本検討会のアウトプットになると思う。そのアウトプットを政策とするにあたり、どの程度に費用がかかるのか、誰がその費用を負担するのかを検討しておく必要がある。（中村座長代理）
- 設定された優先セグメントに賛同。今後の詳細な分析を通じてより効果的な設定ができるとよいが、特に小学校入学前の未就学児が効果的だと思う。（上沼構成員）

【リテラシーを向上するためのコンテンツの届け方】

- よいコンテンツや仕組みができて、届かなければ意味がない。届け方を最重要課題として盛り込む事も検討して欲しい。特に高齢者には新聞、TVがかなり強いメディア。（瀬尾構成員）
- 教材等の中身の問題、届け方等のプロセスの問題の2つがあり、特に後者は重要。中身は、PF等が既に開発しているので、重複することなく連携するのか、あるいはメタコンテンツを作るのか、整理が必要。（山本座長）
- 自治体で高齢者への啓発を行っている消費生活相談員向けの講座を実施することで、一定レベルのリテラシーを教える講座ができるのではないか。技術的な問題はデジタル推進委員によるスマホ講座がある。（石田構成員）
- 教材をボトムアップで地域に広げていく、現場に理解のあるコーディネーターとの連携が必要。（齋藤構成員）
- 海外の例のように教材をモジュール化し、ワークショップなどを行う社会教育施設の職員がそれをもとにしてプログラムを作れるようにすることが重要。（坂本構成員）

【ポータルサイトの必要性】

- ターゲットによって届け方が異なり、リーチできる人数も変わってくる。ただ、セグメントごとの届け方を変えていくと膨大かつ整合性の問題が生じる。核となるポータルサイトをつくり、迷子にならないようにすべき。（古田構成員）
- 対象と言われると抵抗がある人もいるので、アクセス数の多いサイトやニュースサイト、役所のサイトなどにポータルサイトのリンクをおくなど、自分が対象だとあからさまに示されるより、必要な人に届く形がよい。（安野構成員）

【青少年のリテラシー向上】

- リスク回避だけではなく、いかにネットを有用に使いこなして人と関わっていくかということが重要。ILASの中にそういった視点も加味するような検討をしてもいいのではないか。（石田構成員）
- 青少年における成長の発達段階を考えると、リテラシーについて大人と同様の普及啓発を行っただけでは大人と同様の判断能力を得ることは難しく、保護手段についても合わせて考えることが重要。（上沼主査代理）
- 「身に付けるべき5つの能力」において、若年層である大学生がレベル3から4までを身に付けたうえで、社会人となり現場で活用していくことが重要。（尾上構成員）

【リテラシーを向上するためのコンテンツの届け方】

- 作成したコンテンツを社会全体に広めていくには将来的に文部科学省との連携が不可欠であるが、社会全体に広げていくためには出前授業や講義を行うだけでは広がりせず、動画コンテンツによる展開を行うべき。まずは簡単な動画で面的に広げていき、そこで関心を持った層が深掘りしたい場合には講座を受けられるようにするという全体の絵を描いて戦略的に進めていくことが重要。（山口構成員）
- 青少年については、保護者層へのコンテンツの届け方として学校という場にこだわらず、企業などを通じて働く保護者層へオンラインコンテンツを提供していく方法も考えられる。（尾花構成員）
- 面としての広がりで考えると、自治体にどのように協力してもらうかが今後の大きな課題である。ICTリテラシー向上については学校差、地域差等があるため、各自治体への啓発や情報共有が必須であり、また、文部科学省とのさらなる連携も必要である。（中川構成員）
- 動画やオンラインで広めるべきという意見には同意であり、まずは定番の映像、資料づくりをするのがスタートであると思っている。（中村主査）

【保護者のリテラシー向上】

- フィルタリングサービスはあくまでペアレンタルコントロールの1つの手段に過ぎない。家庭内ルールを設けず、なんとなくフィルタリングサービスだけ導入したという場合、結局トラブルに遭ってしまう現状があることから家庭内ルールに係る啓発が重要。（山口構成員）
- 子どもたちが使うサイトについてどういった特徴があるのか保護者に分かりやすく理解していただくというSMAJの取組は非常に重要であり、外部サイトとの連携も信用力向上に繋がり良いと思う。一方で、保護者の理解促進のための工夫（当該情報の届け方の検討、要点を絞り、体系的に情報を整理）が必要と思われる。（上沼主査代理、尾花構成員）
- フィルタリングに関する親子間のトラブルが現場でも散見される。子どもが利用している中で何かあったときに、どういったところが相談窓口になるのかについて保護者が分かっていると、フィルタリングを100%かけるということではなく、子どもとどこかで折り合いをつけるという形になっていくのではないか。（富永構成員）

【その他（新しいテクノロジーへの対応等）】

- ディープフェイク技術の民主化という点に注目している。この技術は今では安価なサブスクリプションでも提供されており、専門的な知識がなくても扱えるようになりつつある。これは批判的思考やリテラシーの範疇を超えており、超えてしまっている部分についてはテクノロジーによる対応が必要になってくるのではないか。（山口構成員）
- AIとして気になっているのはChatGPTであり、大学を含めた学校現場において使っていくのか、あるいは禁止するのかという議論がなされている。これからも続々と出てくるであろう新しいテクノロジーに対して、まず大人の側がどのような姿勢で臨むのか、大人のリテラシーが問われている状況である。またリテラシー全般を扱うにあたっては、総務省としてどこまでをスコープとし、プラットフォーム政策も含めてどのようなポリシーとしていくかを明確化していく必要がある。（中村主査）